



# The Lipper



streaml

私たちはみな、行動を通じて人生の意義を創造する。

その意義を観察し推論を導き出す行為が、すなわちプロファイリングである。

——リヴァプール大学心理教授 デヴィッド・カンター

薄い霧が立ち込める早朝。

八月の朝にそぐわないフードのついたサウナスーツを着込み、男が黙々と走っている。すっぽりと目深にフードをかぶった男は、走りながらぶつぶつと呟いた。

《ちきしょう、何で俺が階級を下げなきゃいけないんだよ。パンチが軽いとかスタミナ不足とか好き勝手言いやがって、何も分かっちゃいねえんだよ会長は、くそっ》

不意に呼吸が乱れたのか、その場で立ち止まりシャドーボクシングを始めた。空気を切り裂く音が静まり返った住宅街に響き渡る。

うっすらと霧が晴れてきて、道路の景観を映し出す。まだ世の中は寝静まっており、ゴミは一つも出されていない。そればかりか都会の朝につきもののカラスも一羽もいなかった。

男はトレーニング——特にランニング——は嫌いだったが、世の中が目覚める前の静謐なこの時間に走るのには好きだった。ささやかながら街の支配者になった気分になれるからだ。今日は生乾きのアスファルトの匂いが鼻につくが、まあいいだろう。頭の中ではぐるぐると同じこと——水道の蛇口から水をガブ飲みしたい——が繰り返され、それをどうにか押しやる一心で拳を振った。

車の往来もほとんどなく、勾配のきつい坂を下った平坦な道路。あたりには閑静な住宅街が広がり、通学路として利用される道が交差する。その交差点のかたわらに、それはあった。位置としては歩道と車道の境目。ガードレールは途切れているが、車と人はちょうどその上を通らない不可侵領域。一見して、周囲から忘れ去れたような不思議な場所。

くの字に折れ曲がった物体の根元は、その不可侵領域にぴったりとくっついていて、まるで地面から生えているようだった。一本の折れ曲がった大根にも見えそうだが、そんな人工的な形は見ることがない。

彼は頭の中でその物体を自分が知っている知識と照合してみたが、何ひとつ一致するものはなかった。家具の一部か、マネキンの一部か——

輪郭がはっきりと知覚でき、人間の高度な目でそれを判別できる状態になった。

彼はおよそ格闘家らしからぬ大仰な悲鳴を上げ、すたとんと腰を落とした。文字通り、精神的にノックアウトされた。すぐには立ち上がることができず、試合であれば間違いなくタオルを投入されていただろう。

その物体は神々しいほどの威厳を放ち、無言でたたずんでいた。艶めかしい乳白色をしていて、今にも動き出しそうだった。

それは紛れもなく人間の体の一部で――、切断された一本の足だった。

(2)

---

「――というわけで」警視庁捜査一課、南条達也がここまでの話しをまとめる。

合同捜査本部に召集されたエリート捜査員の面々は、彼のプロファイリング講義に耳を傾けながら分かったような、分からないような面持ちを浮かべる。

イギリスのヨークシャー・リッパー事件――切り裂きジャックの通り名で知られる――を例に挙げ、今回の殺人事件がいかに猟奇性を伴うものであるか説明を加える。

南条が崇拝するリヴァプール大学教授のデヴィット・カンターは、犯罪者の行動パターンを細かく分析し、類似性をその位置関係で示す『空間マッピング』と呼ばれるプロファイリング手法を擁立した。

最小空間分析（SSA）と呼ばれるこの手法を用いて、過去の日本における連続殺人犯の統計データを描き出す。

分析結果によると「遺体を切断する行為」の近くに「遺体を食べるか血を飲んでいる」や「死後に性行為を行っている」がプロットされた。マッピングで近くに配置された行動には類似性があり、同一犯であれば一連の行動を取る可能性が高いことが推定できる。

これら一連の行動を「犯行のテーマ」と位置付け、犯人像および犯行パターンを細かくあぶり出していく。

「状況から鑑みて導き出される犯人像は――」

数十人ほどの捜査官が皆一斉にメモ帳を持つ手に力を込める。

「猟奇的で、自己顕示欲の強い者。また、現場を安全な場所から監視していた可能性が高いです。遺体が発見される瞬間を自らの目で確かめていた可能性がある、という意味です。配置場所やそのタイミングから、あたかも芸術作品として扱っていたふしがあります。いずれにせよ、常習性が予見されるのは間違いありません。皆さん注意して捜査に当たってください、以上です」

丁寧な物言いになるのも仕方がない。この捜査本部に集められている捜査官の中で南条が最年少なのだ。エリート捜査官の頂点に最速で登りつめようとする男の苦悩は計り知れない。

撫で付けるように整髪された髪を、左手で右へ流した。

――たしかに。

男は南条からの説明を受け、心の中でうなずいた。南条の提示した犯人像は論理的だ。

男が営む探偵事務所の椅子に南条が腰掛けている。男――神咲ジンは二十分ほどの説明を受けると、長身で筋肉質の体躯を立ち上げ天井のシーリングファンを見上げた。

「で、俺からどういう知恵を引き出したいんだ？ 達也」

南条達也とジンは、小学生から続く近所の幼馴染だ。ただし年齢はジンの方が三つ上で、中学では年の差の開きから、一緒に通ったことはない。

警視庁のエリート捜査官である南条は、姫宮第一中学校で神童とあだ名された。

しかし、そのあだ名には両手放しでは喜べない接尾語が与えられていた――神童……神咲ジンの再来と。

達也は小さい頃からジンを尊敬していた。自分をはるかに凌駕するその天才的な頭脳についてだ。ジンは根っからの風来坊で組織に属することを嫌悪した。場末の探偵事務所で生計を立てるのが性に合っているようだ。

達也は彼の天才的で明晰な考察を頼りにし、こうして捜査の重要事項を漏らす事がしばしばある。一般人への捜査協力依頼は、機密保持契約さえきちんと交わしていれば、意外と機能するものだ。

「それですね、ジンさん。もう少し犯人像を絞り込みたいんですが、これを見てどう思いますか？」

厚い天板のテーブルに置かれた検視報告書をジンが読み上げる。

「体の主要部は未だ発見されていないが、もし発見されたとしても既に死亡している可能性が高い。その場合の死因は……溺死による可能性が高い？」

「そうなんです、不思議だと思いませんか」

「切断による失血死ではなく、溺死と判断されている根拠……なるほどね、遺体に残っていた血液の量からか？」

「そのとおり、さすがジンさん。仮に左下肢部切断による失血が直接的な死因の場合、遺体に残るのはもっと少ない血液になるはずですよ。ところが凝血が既に始まっていたらしく、遺体には相応の血液が残留していました」

「なるほど、殺害が先だから左足の内部で凝血が起きたと、それに加えて、異常な水分で皮膚全体がふやけていたってことか。雨が降ったわけでもないのに。で、死斑は？」

遺体がコンクリートなどの堅い物質の上に置かれていた場合、血液が重力によって沈下し、赤や紫の紋様が現れる。

「それが……全くなく、綺麗な状態だったそうです。保存状態もよく……」

「まるで大切にされていたようにか」ジンが達也の言葉を引き取った。

「はい、そうです。今のところそんな情報です。どうですか？ここからプロファイリングに何か情報を付け加える事ができそうですか？」

ジンの亡き父親が、日本におけるプロファイリング捜査における第一人者である。FBIのクアンティコにもDR.KANZAKIの名が刻まれている。ジンは言う。

「芸術作品として遺体を展示しつつも、その場所は……日常。それも、ある種危険地帯に置かれていた。浮かぶキーワードは、そのバランスの悪さ、アンバランス。すなわち不安定……そうだな、慢性的な情緒不安定者だ、犯人像は」言葉を結んだ。

「なるほど、であれば薬物中毒者のリストを中心に当たってみます。ありがとうございます」達也は足早にジンの事務所を後にした。

直後、裏口のドア付近でゴトリと音がした。最近誰かに監視されている気がしていたが……どうもきな臭くなってきた。

ジンは踊り場に出て監視者の痕跡を探したが、何も見つからなかった。ただ、柑橘系の匂いがかすかに鼻腔に残った。尾行しながら果物を食べるかねえ——他にいい考えも思い浮かばず、溜息をついた。

翌日の朝、再び都内で女性の足が置き去りにされた。

それも対になる右足ではなく——、今度も左足だった。

(4)

---

乾いたシンセサイザーの音。西海岸のギャングスタ・ラップは、それに重低音のビートが交錯する。もの悲しいグループは、死肉を求める野良犬を彷彿させる。

まさに野良犬のような目をした男は、西麻布の『ストーンディーバ』で三人目の獲物を物色していた。

充血したぎらついた目を除けば、ここに集う女性たちがお目当ての男性像と一致している。浅黒く日焼けした肌に水泳選手のような逆三角形。目立つほどの長身ではないが、タンクトップでむき出しにした上半身を見ると、実際より上背があるように感じる。

品のない金のネックレスと両腕の上部に輪を描くように彫られた緑色のタトゥーは威圧感を与えるが、全体としてはそれでよかった。

ここに来る女性たちの多くはその男のような見かけの軽い、一晩のお相手を求めているのだ。色とりどりに着飾った熱帯魚たちを、男は射抜くような目で舐めまわした――主に、腰から下半分を。

《こいつは、なかなかの上物だな。何だよ、連れがいやがるのか》

舌打ちをすると、黒のキャミソールで両脚をあらわにしていた女から視線を外した。続いて二階に陣取った円卓から、一階になだれ込んでくる新たな女性の姿を探した。

コロニアル調の邸宅を改造したようなこのクラブは、早い時間から女性客で賑わう。通常こうしたナンパ目的のクラブは早い時間は閑古鳥が鳴き、遅い時間に盛り上がりを見せるものだ。しかしそこは広告代理店出身のオーナーも心得ていて、女性の入場料を『十八時前の入店の場合は無料』にしている。

おかげでナンパの腕に自信があって三千円のチャージを支払う男性よりも、客構成はおのずと女性の比率が高くなる。それはこの男にとって好都合だった。

いつから狩猟の行為が好きになったのか。男は記憶に耳を傾けたが適当な答えは返ってこなかった。いつも頭の中で返ってくるのは妖精の声だ。また、聞こえる。

《ほら、あの子なんてどう？ 手持ち無沙汰にしているじゃない、急いでいきなさい》

妖精はいつも命令口調だった。そしてその声は十七のときに薬物中毒で死んだ双子の姉のものだった。

思い起こせる彼女の顔は、いつもどこかが溶けたように崩れている。細く上向きの鼻や、女生徒が数人集まれば誰しものがリーダーと決めつける意思の強そうな目は、ドラッグによって無残な残骸と化していた。

当時ストリートに蔓延していたMDMA（メチレンジオキシメタンフェタミン。別名エクスタシーで知られる）の中でも、粗悪品と呼ばれる亜種を常に服用していた。そのため、美人とって差し支えなかった造形物を自らの手で――錯乱状態のまま――傷つけて破壊した。

男の初体験の相手は、その双子の姉だった。そればかりでなく自分より早熟な姉から、人生の哲学やアイデンティティを学んだ。

大手飲食チェーン店の社長を勤める父と、世界を飛び回るデザイナーの母を持つ二人の姉弟にとって、家庭の愛はほし草の中の針だった。親代わりは街のゴロツキで、食事は吸引器と注射針だった。反抗心から悪事に手を染め、両親が金でもみ消すといった茶番劇を繰り返し、次第に引き返せない状況に陥った。

彼女の葬式は、ひどく簡素で惨めなものだった。不自然死の原因が違法薬物の摂取と判明したのだから、世間が冷たくても不思議ではない。霧雨が立ち込める告別式でも、息子が両親に毒づく間を与えなかった。両親は数少ない参列者と言葉少なに話した後、それぞれの仕事場へ姿を消した。息子が傷害と薬物事件により鑑別所へ入るのは、それからさして時間はかからなかった。

五年の刑期を追え、真夏の山奥に彼はいた。木々を見て心を落ち着かせ、今後の生き方について前向きに考えようと思った。すると木々が風でこすれるざわめきが、次第に妖精の声に聞こえてきた。

心の蛇口は壊れていた。どうしようもない自己破壊願望に襲われる。そんな自分の中に姉の面影を見た。男は姉との最後の会話を思い出す。

《ねえ……私ってもう、ぼろぼろでしょ》

親から与えられた溜まり場のようなバラックの部屋の中で、姉が寝そべりながら物憂げに言う。

《でも、見て。ここだけは私の自慢なのよ。綺麗でしょ、ねえ、ウンって言って》



彼女が両手で優しくさすって見せたのは、すらりと伸び体毛の細部まで手入れされた――左足だった。

円卓に座ってしばらく眼下を眺めていたが、姉の思い出により自分の分身が次第に隆起してくるのが分かった。衝動を抑え切れそうもない。と言うより、この流れに身を任せたい自分がある。一人の女が目にとまった。

入り口付近の隅で人の波に押し返されたように立ち止まっていて、この手の店に慣れていないことが伺われた。遊びなれた女も結構だが、三人目は趣向を凝らそうと思った。姉がドラッグに溺れる前の姿を思い出す。

一歩ずつゆっくりと歩みを進めていく。男はデザート色のルーズなカーゴパンツを履いている。パンツの内側には鈍く光るハンティングナイフが、皮製のナイフシースに収められていた。

《遅いなお兄ちゃん、何やっているんだろ、携帯もつながらないし》

セントジェームスのバスクシャツにホワイトジーンズ、足元はスリッポンという、およそ夜遊びには似つかわしくない地味な服装で、カンナは口を横に曲げた。

《三年ぶりの再会だっていうのに、こんなうるさい場所で待ち合わせするなんて。あれ、もしかしてお店の名前間違えたかなあ。もう、日本はごちゃごちゃしてややこしいんだから》

夏休みを留学先で過ごすのを止めて帰国したのはいいが、早速そうしたずれを感じていた。向こうの遊びと言え、コテージでキャンプが定番である。日中多忙な兄貴の第一声は「よし、東京の夜を案内しよう」だった。

無論、向こうの若い男女だってバドワイザーを片手に飲み明かすことが間々ある。ただし、知り合いが多い行きつけの店に限定される。勝手に分からない店や土地で、若い日本人女性が酒を飲む姿は、体に生肉を縛り付けてサファリパークを横断するようなものだ。

三回目のコールが留守番電話に切り替わったとき、一人の男が声をかけてきた。

「もし、お連れさんを待っているようでしたら、あそこで時間をつぶしませんか。ほら、あそこだったら座れるし楽でしょ」

男が指差した二階のフロアーには椅子とテーブルが見えた。吹き抜けになっているのでよく分かる。カンナは一瞬考えた。たしかにこのすし詰め状態の一階フロアーよりは快適そうだ。入り口の片隅では、人に追いやられてしまい電話のボタンを押すのでさえ窮する。

「でもすぐに帰りますよ。連れもつかまらないので」

カンナは警戒して無愛想に言った。

「えっ？ 何ですって？」と男が聞き返す。

フロアーには大音量でヒップホップがかかっているのに、女のか細い声は見事にかき消される。男はさりげなく、カンナの声が聞き取りやすいように耳を近づけてきた。

「もう、帰るところなんです」

「何？ 聞こえないな。よし、あそこなら聞こえるから」

そう言うと男は二階を再び顎で示し、中央の細い階段を登って行った。宙ぶらりんの格好となったので、このまま続かないのも何とも間が悪い。仕方なくカンナも上へ登ることにした。

「ここなら少しは聞こえるでしょ。あ、何か飲む？」

男の凶々しい軟派術は勘に触ったが、そこは予想通り芋洗い状態の一階より遥かに心地良かった。音響も一階の巨大スピーカー付近より軽減されている。近くにはバーカウンターもあった。男は手馴れた様子で、バーカウンターからオレンジ色のカクテルを持ってきた。

「どうぞ、これは余ってるドリンクチケットのやつだから気にしなくていい」

喉がからからだったカンナは、すぐに手を伸ばした。

(6)

---

「これってスクリュードライバー？」

「ハーベイウォールバンガーってやつだが、中身はほとんど一緒さ。ウオッカとオレンジジュース、そしてガリアーノっていうリキュール。ハーベイって言う名のサーファーが壁を叩きながら飲んでたのが名前の由来だってさ」

「へえ」

よく冷えたカクテルが、一時間も蒸し風呂状態だった彼女の喉を冷やした。男は微笑を浮かべながらその喉元を凝視していた。

「それでお連れさんに連絡は取れた？」

男は自分の黒いドリンクー彼女にはラムコークに見えたーをがぶりとやった。

「それが全然つながらなくて、やんなっちゃう」

「へえ、そりゃお気の毒に。もしかして急なデートでも入ったんじゃないの。おかげで俺はこうして楽しいひと時を過ごせるんだから、感謝しなくちゃな」

カンナは、こうした台詞は万国共通なのだと思った。どこかで教本キットが売られているのかしら？ だとしたらベストセラーね。

カンナが手の平を上に見せる仕草を、男は見逃さなかった。

「もしかして、アメリカかどっかの帰り？」

「えっ！ どうして？」

「いや、今のやれやれって感じが外人みたいだったからさ」

カンナは見透かされたようで決まり悪かった。

「そう、ミズーリ州に留学してるの。今は夏休みだからこっちに戻ってきてるの」

「へえ、カンザスシティか」

「知ってるの？ いいところよね、緑が多くてキャンパスも広いし」

「湖もでかいよね、オザーク湖だっけ」

「そうそう、へー行ったことあるんだ？　すごい偶然」

カナは親近感を覚え男に興味を引かれた。郷土愛とまではいかないが、自分の住んでいる遠い異国の地を知っている者に気が緩むのは当然だろう。実は男が日本人のみならず外国人もターゲットにしており、話題づくりのためだけに地名や特長を暗記しているのだとは知らずに。

二人の会話は思いのほか弾んだ。今日の服装や日本での最近の流行、好みの音楽やカクテルについて話した。

「ようし、後十分待ってみて君の彼氏が見つからなかったら、俺が家まで送ってあげるよ。ちょうど帰ろうとしてたところだから」

男は時計をチラリと見た。

「彼氏なんて、違うわよ、ただの兄妹よ」

彼氏がいそげと持ち上げられて、まんざら悪い気がしなかった。それにしても、ずいぶんと気分が高揚するのはなぜかしら？　このお酒のせい……？　まさかそんなわけないわね。

約束の十分が過ぎると男は膝を叩いた。

「お姫様の魔法が解ける時間だ。かぼちゃの馬車とは行かないけど、近くまでは送ってくよ。どっち方面だい？」

「いいよ、電車で帰るから……でも、あなた悪い人じゃなさそうね、せっかくだからそうさせてもらおうかな」

彼は右ポケットの中で、カクテルに入れた粗悪品——姉が好んだドラッグ——をもてあそびながらニヤリと微笑んだ。

横にいる女に、ガリアーノがにおい消しの効果が強いハーブ系のリキュールだということに気づくはずがなかった。

路上に止めたコンバーチブルタイプのAMGに彼女を案内した。オープンカーにもできるが今は屋根が付いていた。

「これ、あなたの車？ ボンボンなのね」

カナナは”ボンボン”という表現を少し古かったか、と後悔した。

男の両親の事業は、彼が鑑別所を出た後も順調だった。息子に金を与えることが姉への贖罪となり、真っ当な道へ引き戻す手段だと信じて疑わなかった。金の魔力に取り憑かれた人間の成れの果てだ。

「たいしたことないよ、いいから乗って」

車道でひととき目立つシルバーボディはよく磨かれており、顔が映りこむほどだった。それと相対するように、ウィンドウは濃いスモークガラスで覆われ、外から車内は完全に遮断されていた。車の往来は少なかったので、道路側から彼女は乗り込んだ。

「さあて、それじゃあ行こうか」

「え、ええ……」

男が助手席に話しかけると、彼女は既にろれつが回っていなかった。予想した時間どおりの効き目に、満足げな笑みを浮かべた。三十分のアップー作用と、その後の急激なダウンナー症状。後は極度の睡魔にやられちまう。

姉の命を奪ったドラッグ。

男はこれから繰り広げられる饗宴を想像して唾を飲み込むと、アクセルを強く踏み込んだ。

――カラ、カラ、カラカラ。

こすれるような、かすれるような鉄の音。鉄ではないかもしれないが、金属がきしむような、どこかで聞いたことのある音だ。

でもどこで聞いたんだろう？ 何だろう一体。一定のリズムで、その頼りない音は繰り返された。滑車か何かが回っている……そうだ、ミズーリの古い井戸でこれと似た音を聞いたことがある。

カンナは冷たく薄暗い洞窟のような場所でそんなことを思った。下宿先のミズーリ州から数千キロの日本。それも、さっきまでは喧騒溢れるクラブハウスにいたはずなのに。

あんな派手な店を待ち合わせ場所にした兄を恨んだ。留学先からのつかの間の帰国を楽しもうとした女子大生は、悲劇のドン底にいた――記憶をたぐり寄せる。

電流が走り、車に乗せられた記憶がフラッシュバックする。次の瞬間、一斉に光が注がれた。一生を地底で過ごすモグラの気持ちが分かった気がした。煌々と照らされた室内に、目が全くついていかなかった。目をしばたたかせながら、光源が近い壁から後ずさった。

目の前の壁はガラスだった。そのガラスの向こうに誰かがいる。いつからそこにいるのかは分からなかった。その男は椅子に座って、こちらをじっと眺めている。

助けて！ と言いかけたがその必要はなかった。ガラスで音が遮断されているのが理由の一つ。もう一つは、目が光に慣れてきて男の悪意に満ち溢れた目がしっかりと見えたからだ。茂みに潜む野生動物のように、落ち窪んだ漆黒の中に光を宿していた。

犯人に助けを求める道理はない――カンナは悟った。男は立ち上がったかと思うと姿を消した。

――カラ、カラカラ。カラカラ。

男が姿を消して数秒後、水しぶきが頭にかかるのを感じた。そして頭上を見上げたとき、滝のような真っ白い水流がカンナを襲った。

ジンは事務所の中で瞑想にふけていた。犯人の残した手掛かりは一片たりとも見逃さないつもりだ。情緒不安定なサイコパス。どこで水死させたんだ？ 犯人の幻影を頭で追い、少しずつ追い詰めていく。思考のロジックの最頂点にそいつが鎮座しているはずだ。

風呂の浴槽で水没させてから凶行に至る。もっとも自然な筋書きだ。だが、どうしても腑に落ちない。彼は父親の著書の言葉を借りた。

——Discern order and a disorderly boundary line. (秩序と無秩序の境目を見定めろ)。

遺体を芸術作品に見立てる瞬間には秩序が与えられている、そして、サイコパスに代表されるイカレ野郎なら、単純な殺害手段は用いないはずだ——つまり、無秩序でスケールのでかい、すなわち傲慢な部分がそこはかたなく臭い立つはずなのだ。

浴槽では平凡すぎる……もっと、巨大な、度胆を抜く……。

ジンは思わず考えが口からこぼれ落ちるのを感じた。

「水槽、巨大な水槽で水没させ、それを鑑賞していた……そんなシナリオはないだろうか」

不意に彼の携帯電話が着信を知らせる——エリカからだ。彼女とはちょっとした大人の関係にある。

「もしもーし、ジン？ 元気してた？ 実はさ、あるヤマのことで相談したいことがあってさ、時間取れないかな」

「おいおい、お前たち刑事って奴はどうしてそんなに人を頼りにするんだ」

その表現が少なからず口を滑らせていることに気づいた。

「何？ また誰かの相談を請け負ってるの？ もしかして一課からも捜査協力が入っているのかな、例のヤマについて。ホント警察機構の横のつながりを何とかして欲しいものね。うちの公安部にも個別で指令が入ってるんだな、これが」

彼女の話によれば、捜査本部に据えつけられた看板は、『左肢部遺棄”連続”猟奇事件捜査本部』に書き換えられたそうだ。おそらく近日中に『殺人』の二文字も加わることだろう。



「まあ、相談されているのは事実だ」

「そっか、さては南条君からだな、まあいいやー」

年齢的にも警察学校の序列的にも、南条はエリカの後輩に当たる。もっとも、南条の肩書は警部補なのでエリカ巡査よりは階級的に上ではあるが。

エリカは話の腰を折るように電話を切り上げると、ジンの探偵事務所に姿を現した。

以前の彼女は腰まで届く黒髪だったが、ばっさりと肩の高さで切り落としていた。切り裂きジャックの正体の一人として知られるアーロン・コスミンスキは、床屋だったと言われている。彼女はそうしたサイコパスとやり合う際に、ハサミなどの凶器で自慢の髪を攻撃されなくなかった。

若き日のレオナルド・ダ・ヴィンチが欲望の赴くままに造形してしまったような、肉感的なくびれと曲線。彼女は「刑事になったら絶対に内腿にホルスターを付けて、拳銃を抜く前に犯人を悩殺してみせる」と、息巻いていた。

二人がまだ学生と呼ばれる頃から、互いに淡い恋心を描いていたはずだ。しかし、いつもすれ違いや冗談ばかりで、真剣なパートナーになることはなかった――少なくともこれまでは。彼女が話を切り出す。

「犯行現場の特定を急ぎ、地域住民の安全を確保すること。それが公安部に課せられたミッションよ。テロの可能性は低いと思われるけど、路上の遺体になると上の人が出張ってきちゃって。地域保全の観点から出動ってわけ」

ウインクが様になる日本人もそういないだろう。しなだれかかるような体重のかけ方で、ジンが座る客用ソファの肘掛けに腰を降ろす。色気が報酬の対価とでも言わんばかりに。

――まあ、いいだろう。

ジンは彼女へ説明を始めた。

代表的な地理的プロファイリングに「サークル仮説」がある。これは、土地鑑がない場所での犯行は考えにくいという理論を推し進め、犯行現場と犯人の居場所の位置関係を導き出すものである。サークル仮説では犯行現場が複数ある場合、最も離れた二つの拠点を開始点として円を描く。その描いた円の中に犯人の居場所が収まる、ということになっている。

手がかりは切断された遺体の足。二つとも女性のものだ。

左足が発見された二つの現場、そこを拠点に円を描く。東京都下の現場――サークル仮説を裏付

けるかのようにその距離はそう離れてはいなかった。

その距離が物語るシナリオとしては――水槽があっても怪しまれないような場所がいい。

ネットの地図サイトでサーチをするうち、吸い寄せられるようにそこに目がいった。

『山手水族館跡地』――情報を集める。

すると競売/入札情報のサイトに、ある企業の名前が挙がった。

木崎ホールディング。外食産業のチェーン店で知られる会社だ。入札に係る代表者、木崎一馬はどうやら創立者の息子らしい。

「エリカ、この貸しはどうする気だい？」

「そうねえ、もし正解だったら、何か好きなものをご馳走してあげようかしら」エリカは耳元で囁いた。

シャネルのココ・マドモワゼルか――。その香水のラスト・ノートは、オレンジだった。

そこは忘れ去られた空間だった。閉館された水族館など危なっかしくて誰も近づかない。ロビーには真夏の熱がこもり、すえた匂いが充満していた。プールでよく嗅ぐ塩素の匂いだ。埃が降り積もり、数年はこの状態で放置されていたことが伺える。積まれた段ボールの山からは口や布の切れ端が覗いた。

壁に貼られたポスターはイルカショーについて書かれた物で右隅が破れている。建物の周囲を取り囲むような長い通路が続く。通路の外側はガラス張りで埃と蜘蛛の巣がこびりついているが、わずかに明かりを伝えていた。

しかし通路の行き止まりから一段奥へ進むと、途端に光が不足する。下へつながる細い螺旋階段――建物内部は船内をイメージしているようだ――を下りる前に、ジンは言った。

「エリカ、警察の七つ道具はちゃんと持ってきてるか？」

両手でポケットを確認する仕草を見せ、戸惑いの表情を見せる。えっ、何それ、と。

「拳銃、手錠に警察手帳。それに警棒とかを七つ道具って言わないか？ その顔を見ると言わないらしいな、そうか。いや、そん中にこいつが入ってないかと思ってさ」

ジンはそう言うと、チノパンのポケットからマグ・インストルメント社製のミニマグライトを取り出して見せた。アメリカの警察でも採用されている強力な懐中電灯が、階段下の闇を照らす。犯人の心の闇を照らすかのように。

「さっすが、準備万端ね」一条の光の先を追う。サーチライトのように照らされる壁。

いつ血まみれの人間の顔が飛び出してもおかしくないほど、あちこちが薄汚れ朽ち果てていた。鉄筋の骨組みの上に、船舶を思わせる板を打ち付けているせいだろう。腐食した材木の臭いが、吐き気を誘った。

ジンは地下室――いや、地下にある展示ブースを探した。そこに監禁しているか、バラバラに切断する為の場所があるに違いない――あるいはその両方か。

五メートル。十メートル。

二人は時間を気にしながらも、慎重にゆっくりと周囲を警戒しながら先を進む。さらに下の階へ

つながるはしごを見つけた。こんな使いにくい移動手段を提供していたのであれば、客からのクレームも相当あったに違いない。子供は楽しいだろうが、年寄りはこちらで立ち往生するからだ。

一段地下に降りると光と熱が遮断されているのか、寒々としていた。

「ますます、ホラー屋敷じみてきたな」意地悪く言った。

「おどかさないでよ」ジンのシャツの端をつかむ。

正面に木製の両開きの扉が見えた。ツタのような彫刻が施された扉は、主の帰りを待ち続ける古びた洋館に思えた。

ギイッ。きしみにも悲鳴にも聞こえる音を伴って、扉は開いた。

中はガランとしていた。ライトを左右に走らせる。エリカは壁にもたれかかり、ジンの背中越しにライトの先をにらんだ。

腰のホルスターに手を伸ばし、オーソドックスな自動拳銃『ヘッケラー&コッホ P2000』のグリップに手を添える。銃撃戦に遭遇したこともなければ実戦で発砲したこともない――銃の持つ緊張感に押しつぶされそうになる。

「エリカ、警察では許可してないかもしれないが……俺にその銃貸してくれないか？」本気とも冗談とも取れる口調だった。

「だ、駄目よそんなの。もし撃っちゃったら、とんでもないことになっちゃう」彼女はたじろいだ。

「だよな、じゃあ、お前が構えてくれよ。そうやって手を添えるだけじゃなく、ちゃんと銃口を構えるんだ。奴は間違いなくこの近くにいる。いかれた凶悪犯だ」

彼女の返事はなかった。それでも彼のいうとおりに、銃身をライトに沿わせて狙いを定める。額と脇の下に、暑さからくるわけではない汗が伝う。

空洞のような部屋の真ん中に差し掛かると、舞い上がる埃が浮かび上がった。そのときだった。

足元の木の床が大きくたわんだかと思うと、爆撃が落ちたような轟音が響いた。バリバリッ！ という音。手に持っていた光と共に彼は姿を消した。

「ジン！」エリカの叫びがこだまする。

犯人が潜んでいたら、ばれてもおかしくないほどの声量だ。がらんどうの闇に向かって立ち尽くす。

立場が一転した。数秒前までは、銃が持つ意味の重さにおののきながらも悪を追い詰めていた。彼が近くにいるのは何と心強かったことか！ 彼女は思い知った。

光も失い、ここからどう動けばいいのかすら分からない。その音を聞いたとき、心臓がぎゅっとすぼまった――靴音だ。それも背後から。

ジンのはずがない、どうしよう、犯人だわ。

極度のパニックが全身を襲う。しかしその危機的状況のおかげで、警察官としての本能を取り戻した。こいつを捕まえれば、何とかなる。

エリカは暗闇の部屋に進み、壁沿いに身を隠した。ど真ん中にはきっと大穴が開いているだろうが、壁際はたまたま無事だった。

足音は廊下を曲がり、彼女が隠れている部屋を見通せる場所に到達した。

コツコツ、と木の床に乾いた音が響く。革靴でも履いているのか。

部屋の中に光が入ってきた。ジンが持っていたマグライトより一回り大きい光源だった。せわしなく部屋の壁を照らしていたが、やがて中央の裂け目に焦点が合う。

そのまま、そのまま。ようし、ゆっくりと入ってきて。神頼みに近い祈りを捧げながら、銃口を侵入者へ向ける。一步、二歩。三歩――。

侵入者は嫌な気配を感じ取ったかのように、部屋の入り口でピタリと立ち止まった。呼吸音が聞こえてきそうな程の位置で。光の輪はふらふらと上下し、裂け目のところでぐるぐる回った。そして、UFOが去るようにふっと消えた。

来た道に戻ろうとしているに違いない――彼女はそう判断した。

千載一遇のチャンスを逃す手はない。足音を立てないように最大限に注意しながら、入り口へ近づく。

落ち着いて。相手は背中を向けているはず、こっちは銃を持っている。

始めにかけるべき言葉は、両手を上げなさい！

今までのどんな経験――高校の卒業式で任された答辞の挨拶、デートの約束で初めて電話するとき――でも味わったことのない緊張が駆け巡る。

覚悟を決め、部屋の入り口へ躍り出た。銃口を相手の方向へ差し向ける。

そこには暗闇しかなかった。ライトを消しているのかと思い、エリカは一旦部屋の壁に隠れた。しかし、目を慣らして両足を広げ、再びホールドアップの姿勢で飛び出したとき、状況を理解した。侵入者はすでにそこにいなかった。

侵入者が照らしていた先には、巨大な水槽があった。しばらくするとジンがマグライトを持って駆け付けた。

そしてエリカ達は、三人目の被害者の姿を目のあたりにした。

遺体は左足を切断される前の状態で、苔まみれの水槽の中に沈んでいた。右足には、肉体が浮かび上がらないように石の重しがくくりつけられていた。被害者の心の叫びがガラス越しに伝わってくるかのようなようだった。

彼女が警察本部に連絡すると、数多のサイレンがドブラー効果を再現しながら現場に到着した。

現場を立ち去る二人に言葉はなかった。

それから数日が過ぎた。事態は急転直下することになる。

エリカ経由で、水族館跡地に入札していた木崎ホールディングの代表者、木崎一馬が飛び降り自殺を図ったことを知らされた。

警察が男を連続殺人犯と公表すると、マスコミは警察の不手際をすぐに糾弾した。容疑者をみすみす取り逃がしたのも同じだと。

ジンがプロファイルした人物像は、様々な情報源から答え合わせがなされた。

情緒不安定な男はドラッグ常用者で、投資家の肩書を持ち合わせていた。潤沢な資金と、ある種天賦の才を持ち合わせていたようだった。水族館の跡地も、彼個人の資金を担保に買い付けたというのだから驚きだ。日々、乱高下する人生を歩んでいたに違いない。

騒ぎが数日で鎮静化する中、ジンとエリカは木崎一馬の自宅マンションにいた。

そこは典型的なタワーマンションの一室だった。

捜査本部の現場保全もほぼ終了し、鑑識課などの連中は現場を引き上げていた。

ジンとは正反対に自殺という結末を喜んで受け入れようとしているのだろう。余分な仕事が減るのだから。

衝動的な転落自殺――投資家の姿をもつ被疑者は、当日の深夜に為替の大暴落に巻き込まれ、そのショックと一連の罪の意識にさいなまれたことから自殺したという見解が示された。

ジンは手袋をはめ、男が商売道具としていたパソコンに電源を投入した。

そしてツールを立ち上げると、おもむろに投資内容が記された約定履歴を仔細に確認しはじめた。

15:00 USD/JPY 新規買 5,000,000 93.00

15:21 USD/JPY 決済売 5,000,000 93.20

15:35 USD/JPY 新規買 5,000,000 93.20

15:55 USD/JPY 決済売 5,000,000 93.40

16:30 USD/JPY 新規買 5,000,000 93.00

16:58 USD/JPY 決済売 5,000,000 92.80



そして、自殺のトリガーと言われている建玉の損失状況についても別の画面で確認する。

17:50 USD/JPY 新規買 5,000,000 94.00

未決済 実現損益 -20,500,000円

モニター上部で明滅する数字には、Bid 89.90と示されている。

チャートの矢印も右肩下がりで、地獄の釜が口を開けてその先に待ち構えているように見えた。

《4円落ちか.....500枚の買い建ての逃げ遅れで2000万円の被弾と。まあ、精神的に影響はあるだろうな》

すべての数字をスマートフォンで撮影し、画像化するとジンは大きく息を吸い込んだ。

「エリカ、こいつは自殺なんかじゃねえ。おそらく他殺で、この損失もたまたまできたものだ」

エリカが素頓狂な顔をジンに向ける。

「その可能性はあるかも知れない。でも、この変てこな数字の羅列だけでどうしてそこまで分かるの？ 私こっち方面に詳しくないから、ちゃんと教えてよ」

「いいだろう。ここの新規買と決済売に書かれている時間と、そこで動いた数字をよく見るんだ。実際にやったことがないと分からないだろうが、一般的にこの取引時間は短い部類に入る。だから、この数字の開きも少なくなる。数字の開き具合が利益であり儲けになるんだけどな」

「そうなの？ じゃあ被疑者は、短い時間でごく少額しか儲けていなかったってこと？」

「いや、それは違う。この”5,000,000”という数字は、保有している単位を表すんだが、この500万という数字はなかなかの大きさだ。とても一般人で扱える単位じゃない。単純に100倍してみるとおよその規模がわかる——約五億円分の取引だ」

「ごっ、五億円？」目をしばたかせた。

「それぐらいの額を動かして、そうだな……一回の利益として100万円程度を市場からさらっていたことになる。それも数十分でだ。こいつの取引方法は、20ピップスという細かい値動きの単位でトレードするスタイルだったが、賭けている金額が大きいから儲けもそれなりにでかくなる」

「へえ、そんなわずかな時間でね」

「ここで疑問が生じる。こうした取引の手法を、ひっかく様になぞらえてスキャルピングというんだが、そのスキャルピングにしては不自然な状況になっているんだ」

「どこが？ もっと分かりやすく教えてよ、ジン」

「いいか、急落が起きたのは深夜のことだ。そして、こいつの取引履歴を見ると、自分の予想と逆になった場合は、きちんと損切りをしている。ほら、この部分だ」

「損切りって、どういうこと？」

「損失を限定的にとどめる方法さ。つまり、もの凄く損する前に潔く諦める行為と考えればいい。で、おかしいのが、このチャートさ。奴が取引していた時刻の間は、波を描きながらも右肩上

がりになってるんだ。やつの買いポジションにおいては、利益を確定するチャンスはいくらでもあったわけだ。そして、急落が起きるのは、日付をまたいだ深夜2時以降。検死結果によると、奴の死亡推定時刻はその日の18時前後――」

エリカは、ジンの言葉を待った。

「つまり、死んだ日中の取引時刻の間には、奴が死ぬ理由は存在しなかったわけだ。順調に利益をいただくチャンスはあったけどな。たしかにこの残された口座だけを見ると、精神的ダメージの元凶に見えちまうが、時系列的にどうもおかしいんだよ。それに、いまだに自動的な手じまい――これを、ロスカットっていうんだが、――それが執行されていないところを見ると、資金は潤沢にあることになる。つまり、死ぬほどの衝撃はないに等しい」

「じゃあ、損失によるショックはなくて……18時前後に何者かに襲われた疑いが高い、そういうことね」

「ああ、奴はここ数年安定して取引を行ってきている。履歴をさかのぼって見れば明らかだ。十分に利益を上げているところを見るとある種の天才だったかもしれない。それが、その時刻に急に取引を放り投げた。死因が心臓発作なら分からなくもないが、転落事故ときてる。きな臭い以外の何物でもありゃしない。深夜の暴落劇はたまたまであり、理由の後付けにしかない」

「ジン、まさかとは思うけど……犯人に心当たりがあったりする？」

エリカは"刑事の性"と言える真犯人に近づいた興奮を、そのまま熱い吐息に乗せた。

「ああ、そこの壁にピンで止めてある写真で気が付いたよ。狂人のコレクションってわけか。ご丁寧に殺す前に写真を撮ってるだろ。その水槽の中に写っている子に見覚えがあるんだ。この前は薄暗くてよく見えなかったが、これなら分かる」

しばしの沈黙ののち、エリカは唾を飲み込んだ。

二人の沈黙を破るかのように、一人の男が慌ただしく飛び込んできた。

「エリカ巡査、来てたんですか。ああ、ジンさんも。でも本当は駄目なんですよ、いくら捜査協力者とはいえ、一般の方がここまで入り込むのは。参ったなあ」

首をかしげ、達也は薄ら笑いを浮かべる。

次の瞬間、エリカが達也の後ろに滑り込む――ほんの一瞬だった。

エリカの細い両腕であっても、男を押さえつけるには十分だった。達也のこめかみには銃口が押し付けられている。

「動かないで！」エリカの言葉がこだまする。

「な、何の冗談ですか、エリカさん。拳銃を人に向けたら冗談では済みませんよ。ねえ、ジンさん、ちょっと突っ立ってないで、何とかしてくださいよ」

動きを最小限にとどめながら、蚊の鳴くような声で言う。

状況を正しく理解できていないようだ。部屋の空気がまるでアスピリンに舌先が触れたようにピリリとする。

「いや、それで間違いはないんだ」

「ど、どうゆうことですか？ 彼女は気でも違えたんですか？」

「そこの写真を見てみる、達也――」

その写真を見ると、達也は顔色を失った。

「俺たちは、出会っている、そうだろ？」

達也の返事を待つまでもなく、自らの心の中で答えていた。

――たしかに。

俺たち三人は、あの夏の日に出会っている。

ミズーリ州のリバーサイド。コテージの近くでバーベキューパーティーを楽しむ自然な三人。  
《お兄ちゃん、ジンさんばかりに手伝わせないで、ほら、自分のお肉もちゃんと焼かなきゃ》  
《悪い、悪い。あまりにもここの空気がおいしいものだからさ、つい飲みまわってな。あ、ジンさんもどうです？ コロナだったらクーラーボックスに山ほど冷えてますからね》

《おっ、気が利くねえ。ってどうせこれもカンナちゃんの仕込みだろ》

そう、南条カンナはあいつの妹だ。

「いつから気づいていたの、南条君？ 犯人がこの家主の木崎一馬だってことに」

油断なくエリカが言う。しかし、達也は答えない。

「達也、全部ばれてるんだよ。エリカが動いていたのは、他でもねえ警察内部の不穏を察してのことだ。ある時期から、本部の機密情報に片っ端からアクセスして散らかしてる奴がいるってな。ちょうどお前の妹が失踪した直後からだろ？ お前が調べ始めたのは。それで、公安の勅命を受けてエリカが尾行してたってわけだ。まあ、俺もそこまでは気が付かなかったがな」

エリカは拳銃をゆっくりと降ろして、片手でジンに向かってお詫びの合図をした。

「そうですか、僕を疑ってたんですか……」

「おっと暴れるのはなしだぜ、達也。親友を傷つけない」

ジンは本心から言った。日々、危険と隣あわせで生きる男の拳はそれこそ危険極まりない。

「あいつが許せなかった……ただそれだけです。だってそうでしょう！ あんな殺人鬼を野放しにしておいて何が警察だ、何が国家権力だ、何がプロファイリングだ……ジンさんが、家族や愛する者を奪われたら、どうしますか！ エリカさんが生きる価値もない殺人鬼に凌辱されて惨殺されたとしたら、本当に許せますか！ 法に委ねるだけでこの気持ちがおさまるんですか……」

達也は床にへばり込み、大声を上げる。おもちゃ売り場で大声を張り上げる子供のそれと変わらない。大粒の涙と狂乱。空気が悲鳴で大きく歪む。

「俺が奴を殺した手段までは、突き止めちゃいけないでしょう！ だったら俺を逮捕することはできない……無駄なんだよ」

何かに取りつかれたように、口調が変わっていく。ジンとエリカは身の毛がよだつのを感じた。

「南条警部補、それは自供と受け取ってよろしいでしょうか？ 詳しくは署でお伺いさせていただきます」

エリカのかしこまった口調が、場に緊張をもたらす。

「いやーまいった、まいった」開き直ったような口調で、男は笑った。  
普段の好男子の顔ではなく、薄気味悪い異常者の顔だ。

「中南米で流通している神経ガスに、不思議なものがあるんですよ。まあ、これも機密情報で木崎を探している最中に見つけたんですけどね。お初の方は、全身麻酔みたいにしびれちまって身動きができなくなる。呼吸もちょっと苦しいぐらいにね」

「おい、まさか……お前」

「な、なにこれ、体がいうこときかない……」

「もちろん、脳に直接作用するものですから、それに対する人体の免疫能力も目を見張るものがありますよ。大体、二、三回嗅ぐと、もう効かなくなっちゃうんですよ、不思議でしょ。まあ、僕はもうかれこれ十回以上は嗅いでますからね」

床に崩れ落ちた二人を、冷えたピザをゴミ箱に捨てるような目で見つめる。

「木崎を放り投げるのは簡単でしたよ、実に痛快だった。でも、お二人にはしませんからご安心を。いい機会じゃないですか、中学時分には叶わなかった天才対決の決着をつけるいい機会だ」

「て、てめえ……何を言ってやがる」もう、口を動かすのも限界だった。

「僕は嫌なんですよ。これ以上犯罪者のせいで人生を台無しにされるのは。だから、絶対に捕まりせんよ。頭脳ゲームにも自信がありますから。だからこそ、こうして今の自由がある、そう思いませんか？ まあ、お二人にはこのまま眠っていただきますよう」

薄れいく意識の中で、ジンは達也の幻影を追った。バーベキューやキャッチボールにテレビゲーム、様々な遊びのさなかに彼が見せる悲しげな瞳が浮かんでくる。

俺たちは、どういう関係だったんだ？ 近所の仲の良い友達以外に深い意味はあったのか？

「僕はジンさんがうらやましかった。すべてにおいて完璧で尊大で、頼もしくって。覚えてますか？ 僕が中学の時、不良の高校生にからまれちゃったこと。ジンさん一人で相手を叩きのめしちゃったじゃないですか。あんなのできるの、ジンさんしかいないんですよ。それで、俺もあんな風になりたいってさあ……分かる？ 俺の気持ち？ おーい、倒れてんじゃねえぞ！」

達也の口調が明らかに変わった。うつ伏せのジンの腹部に、右足で強い蹴りを入れる。

「あんたのヒーローごっこには、まだ続きがあってさ。俺やられちゃうんだよね、あの後。その高校生のリーダー格の奴にさ。見た目には傷は一切つかないからさ、あんたも気づかなかったよね。普通に脅迫されただけだからな。それで結構な慰謝料を支払ったよ。あんたが散々痛めつけたもんだからさ。親にも言えねえし、貯めた小遣いをはたいてさ。分かるか？ 俺の気持ちが。あんたみたいな何でもできちまう天才にはちっとも分からねえかもしれないがよ」

執拗に蹴り倒す。ジンとエリカは全身に麻酔が効いているようになり、半ば意識が飛んでいる。積年の恨みを果たすかのように、男は続ける。

「笑っちゃうだろ、そんときの高校生があの木崎さ。最終的には俺のことを気に入ったらしく、色々とおごってくれるようになったが、あの下衆な根性は大人になっても変わりやしねえ。くそつたれドラッグも俺に勧めるもんだから、こっちまでおかしくなっちゃった。ふう、こんなもんでいいか。そろそろおいとましねえと足がついちまう。遺体の足を切っても、足がつくってな…



...ククク」

男は完全に錯乱状態だった。

「最後に、いいことを教えてやろうお二人さん。妹のカンナ以外を殺したのは.....この俺だ」  
動けない二人がピクンと反応する。

「正確に言うと、俺が計画やアイデアを考え.....それを木崎の馬鹿に実行させたってわけだ。なんでこんなことをしたかって？ 自分でもよく分からないよ。抑圧されていた知識の願望とでも言えばいいのかな。だいそれたことを、一番やっちゃいけない職務のものがやってのけることが痛快だったんだよ。んで、妹の失踪があって、調べてみたらクソ野郎とご対面ってわけさ。因果応報っていうのはこのことだ。アホくせえ。カンナだけは.....」

少しだけ人間らしい表情を見せたかと思った。

最後にジンとエリカを一瞥すると、何事もなかったかのように入り口から消えた。

ジンとエリカの体が神経を取り戻すには、それから二時間ほどかかった。

――忌々しい事件から数日のときが流れた。

探偵事務所には、暇ではない程度に依頼が舞い込んでくる。

南条達也の件は、マスコミに完全に伏せられていた。

世間でいうレッグ・リッパー事件は木崎一馬の単独犯ということで幕を降ろしていた。

携帯が鳴る――エリカからだ。

「やっほー、ジン、また新しいヤマなんだけど、テレビ見た？ 例の山あいのキャンプ場を中心にした殺人事件なんだけどさ……もしかして、彼の仕業じゃない？」

少し元気を取り戻したように聞こえた。

「どうかな？ それより、念願かなって公安部から捜査一課に配属替えになったんだって。そいつのお祝いをしなきゃな」

「うーん、お祝いもいいけど、私の初仕事に手柄を添えてくれる気はないのかな？」

彼女の鼻にかかったトーンが聞こえる。

「おっと、そういう相談はなしだ。まずはこの前のツケを先に回収させてもらおうじゃねえか……っておい！ 切りやがった、あんの女狐めー」

新しい事件、そして犯人。

善と悪。白と黒。光と闇。直感的に相容れない存在であり、戦いや争いを永遠に繰り返す旧敵。コインの表と裏のように、どちらかが存在すればもう一方も必然的に存在する。

ジンは、達也とまた会いまみえる予感に駆られた。

そして、その予感に身震いすると自分自身に向かって言った。

「奴を倒すことが俺の背負った十字架なのだろう。そうしなければきっとあいつ自身が浮かばれない」

——たしかに。

Fin

## The Lipper

<http://p.booklog.jp/book/69502>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69502>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69502>